本棚

蔦谷栄一　著

『食と農と環境をつなぐ

―農業・農村 そして暮らしのスケッチ―』

ちかごろ，「食の安全」問題，「環境問題」と，ヒトの生存を根源的に脅かす問題の顕現に伴い，一般の人々の農業に対する関心はにわかに高まっている。しかしながら，農業の特定側面についてのトリビア的知識の解説ではなく，人の生命を育む母胎としての農業をトータルな視点から考えさせてくれる良書は意外と少ない。本書は著者が2000年以降５年ほどの間（振り返れば農政面でも激動の５年であったが）に折りにふれて書き溜めてきたコラムを取り纏めたもので，①その時々のトピックをテーマにしており，話題の多様性から飽きさせない。②率直なメッセージを簡潔に発信するコラム形式の特性が活かされ，主張が明確であることから一般の方々にも読みやすい本に仕上がっている。

テーマの多様性という観点から項目立てを概観すると，①農政・ＷＴＯ，②食料需給・食料自給率，③担い手・農業，④環境・地域循環，⑤地産地消・食・消費，⑥農業体験・都市農村交流，⑦協同組合・金融，⑧暮らし・地域・文化，⑨海外の食・農・暮らし，の大きく９項目に及んでおり，農業・農政に関する諸課題を俯瞰することができる。

余談だが著者は座談の名手である。車座になって酒を酌み交わしながら相手を説得するような気分で，コラムは書かれたに違いない。その高揚・酩酊感が読者にも伝わり，読後感はきわめて壮快である。正式の標題のほかに「農業・農村そして暮らしのスケッチ」という軽いタッチの副題が付されており，こちらの方が執筆スタンスに合致しているように感じられる。

こうしたコラム集は，目次を見渡し，気の向いた項目を拾い読みするのが作法である。評者は「田舎のスナック」という標題に惹かれて頁を繰ってみると，「農業基幹労働力としてのカアチャンのアフターファイブ事情」といった内容が著者得意の現場観察から説き起こし，その拠って来る所以（ゆえん）まで説明され，ちょっとした研究論文の「要旨」といった趣の内容であり，時間的余裕に乏しい人々が「現代農業」を考えるきっかけに最適と考える。

また本書をＪＡの青年部なり，若手職員なりが集まって「農業の現状とありたい方向」を論ずる茶話会での話のネタ集として使ってみてはいかがであろうか。そうした使われ方こそ著者の本望なのであろう。

――全国農業会議所　2008年11月

1,200円(税込)263頁――

((株)協同セミナー監査役　小松孝宏・

こまつたかひろ)

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。